洞察的心理療法の方法論的考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萱原, 道春 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/602

洞察的心理療法の方法論的考察

萱原　道春

Methodological Consideration of Insight Therapy

Michiharu KAYAHARA

はじめに

精神分析療法，ユング派の心理療法，ロジャーズ派の心理療法などを，洞察的心理療法と呼ぶ。これらの治療法はその中核が人格の葛藤的な部分を洞察することにある点で一致している。しかしこれらは，臨床場面では互いに共通する現象に直面しながら，理論化の時点で必要以上に袂を分けてしまっている。各々の分派を含めるとその分枝は相当な数になる。それらが錯綜した状態にあるのだから，科学としては混乱状態にあると言われても仕方がない。

この原因は方法論についての議論を我々が十分にしてこなかったからだと思う。藤原(1992)は，心理臨床大事典の「方法論」の項を執筆担当して，最後に“この課題は予想どおりに難しく，可能性と必要性に満ちていることは明確化されたが，現段階ではなお混沌とした状況にあると痛感された。”と結んでいる。これが大方の感想であろうと思う。

洞察的心理療法の方法論的問題について，これまでもいくつかの論文や著書が書かれているが，われわれ哲学の初学者が抱く共通の疑問(初歩的ではあるが根本的な問題に通ずる疑問）に対して簡明で説得力のある回答を示しているとは言いがたい。筆者自身そのような回答をずっと求めていたのだが，なかなか得られなかったので，浅学を顧みず本論文をまとめることにした。ぜひ多くの方の御教示や御叱正をいただきたいと思う。

I　意識／無意識／脳

まず最初にこの章では存在論的問題について整理しておきたい。

1．意識と物質の限定つき二元論

我々は自分自身の意識を直接観察することができる。しかし他者の意識を直接観察することはできない。脳という物質をいくら調べても意識をそこに見い出すことは不可能に思える。どうしても意識と物質は別の存在であると考えざるを得ない。つまり二元論である。しかし意識と脳の相互作用を考えると，たちまちのうちに矛盾に陥る。まったく別の存在ならば両者の間に接点はないのに，どうやって相互作用をもつことができるのか，という問題が提出されるからである。二律背反が生じるのだ。

それでもなんとか二律背反を超越しようと試みるところに哲学の真の存在意義があるのかもしれないが，我々としてはそのような思索の領域まで足を踏み入れる必要はなかろう。意識と物質について限定つきの二元論（図１参照）を採択するのが我々にとってはもっとも妥当な選択であると思う。

2．無意識

無意識という概念は２種類にわけて考えなければならない。

①説明概念としての無意識

意識現象や行動（人間存在の物質的側面の現

平成７年９月18日受理

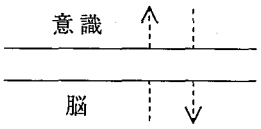

図1　意識と物質の限定つき二元論

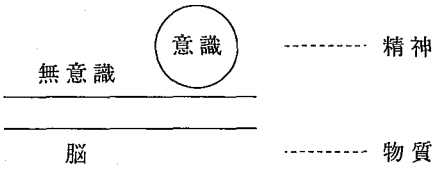

図2　意識／無意識／脳

象。心理学ではモル行動と分子行動に分ける。)を説明するために設けられた仮説構成概念としての無意識がある。この種の無意識概念は心理学の多くの分野で使われている。記憶機構，態度，知覚の構え，思考の計算器モデル，人格，心的エネルギー，元型，等等。

たとえば記憶機構を例にとって説明しよう。意識の中に過去の記憶が想起される現象を我々はみな認知している。では「なぜそのような現象が生じるのか」と考えたとき，膨大な記憶が貯蔵されている記憶機構というものを想定せざるを得ない。ではそれはどこに存在しているのか。意識の中に存在していないのならば脳に存在しているのだと一気に物質の世界に飛ぶわけにもいかない。意識の中にはないが物質でもない「何か精神的なもの」の存在を要請せざるを得ない。これがここでいう無意識である（図2参照)。意識と物質の二元論にこの無意識を加えると三元論になると言えなくもない。

なおこの種の無意識の実在性を観察（内観および知覚）によって直接検証することは勿論できない。論理的に辻褄があえばいくらでももっともらしい仮説を作ることができるため，下手をするとただ混乱を引き起こすだけの結果を招いてしまう。無意識的機構についての仮説構成概念を作ることには慎重でなければならない。洞察的心理療法の理論化をおこなう場合にも，このことはしっかりと心に留めておく必要がある。

②認識に至らない意識としての無意識

意識の中に存在しているのだが十分に認識されるに至っていないものを無意識と呼んでいる場合がある。それがこの種の無意識である。葛藤の洞察という問題を取り扱うとき，臨床場面で重要なのはこの無意識である。「Ⅳ葛藤の洞察」の章で詳しく論じる予定である。

Ⅱ　病因論と治療法

問題を解決するには問題を生じさせている原因をつきとめそれを治療しなければならない。精神科や心理臨床の分野では原因をはっきりと確定できない場合が現実には多いが，しかし治療がこの理念的シェマに沿って考えられるべきことに変わりはない。

では原因として何が考えられるか。大きく分けると2種類しかない。脳という物質的原因と心理的（精神的）な原因である。物質と精神という2種類の存在しか我々は認めないのだから，原因もこの2種類しか考えられない。この2分類を基にして原因はさらに細分化され，それぞれに対応する治療法が確立される。

図3は洞察的心理療法の治療機序を示したものである。問題を解決するにはその原因となっている情緒的葛藤を処理しなければならない。どうすればよいか。葛藤と対峙しその正体をはっきりと認識すればよい，というのがこの療法の根幹を支える経験的知識である。

なお，洞察的心理療法に含まれる支持的要素も，情緒的葛藤の軽減に，副次的でなく直接的に関与しているのではないかという議論がある。育て直しとか修正情動体験と呼ばれてきたものである（「愛する」という概念で言い換えて

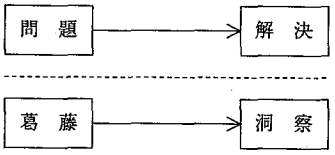

図3　洞察的心理療法の治療機序

もよいかもしれない)。これは治療的にはひじょうに重要な問題であるが，ここでは示唆するだけに留め，また別の機会に論じたいと思う。

Ⅲ　意識の構造

洞察的心理療法はクライエントと治療者の双方に自身の意識をしっかりと見つめることを要求する。この章では意識の現象学的構造について整理しておきたい。

1．対象意識と自我意識

意識はまず対象意識と自我意識の二つの側面に分けることができる。対象意識とは「何かについてしかじかと覚知しているという意識」，自我意識とは「それを私が意識しているという意識」のことを言う。自身の意識を見つめるというとき，問題となるのは対象意識である。自我意識は分裂病圏の自我障害がある場合を除いては，直接的な問題とはならない。

2．対象意識の構造

対象意識の全体的構造を整合的に秩序だてようと試みると，どうしても思考による加工を加えねばならず，そうなると純粋な現象学ではなくなる。図4は正にそれなのだが，以下の説明を分かりやすくするために提示しておきたい。

①感覚と表象

感覚はすぐに確認することができよう。表象はどうであろうか。視覚表象や聴覚表象はかなり明瞭に思い浮かべることができる。しかし味覚や嗅覚，触角の表象を明瞭に思い浮べることはなかなか困難である。聴覚表象は例えば内言という形で我々の意識に四六時中現われているが，視覚表象も思っている以上に意識によく現われている。たとえば目をつむり腕を挙げてみる。多くの人は同時に腕の視覚表象が浮かんでくるだろうと思う。なお表象と類似するものに残像があるが，これは感覚と表象の中間に位置づけられている。

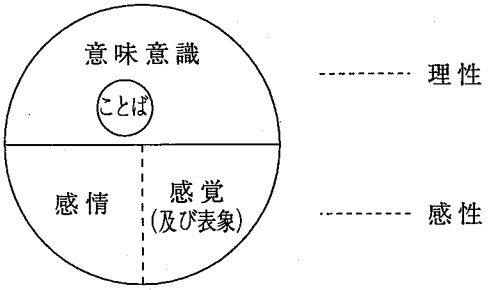

図4　対象意識の構造

②ことば

自分の意識からことばを消そうと試みてもなかなかできるものではない。ことばのない意識，たとえば乳児の意識などを思い描くのは我々にとっては困難なことである。それほどことばは我々の意識生活の多くの部分を占めている。

ことばは二つの要素から構成されている。言語記号と意味意識である。前者は感覚あるいは表象として意識される。後者の存在は「感じる」ことによって意識される。ある瞬間の意識に存在する意味意識のすべてが言語記号と結びついているわけではない。結びついているのは一部である。

ことばとは即ち思考のことである。思考の本質的な部分は意味意識であるが，なぜ言語記号が必要なのだろうか？一つは他者とのコミュニケーションのため。あと一つの理由はつぎのように考えられる。意味意識は感じられるものなので，そのままの状態ではひじょうに漠とした状態でしか覚知できない。それに明瞭な「形」を与えるには感覚的あるいは表象的な言語記号を与えて，物象化することが必要である。

③感情

感覚と表象およびことばや意味意識を除いた後に残る，やや「その他ボックス」的なものが感情である。波立つ感情が存在している時にはたしかに感情というものの存在をはっきりと覚知できるが，そうでない時にはっきりと覚知するのはなかなか難しいものである。たとえば活気など。これらは生命的感情と呼ばれている。

感情の存在はいうまでもなく「感じる」ことによって知られる。ここで問題が生じてくる。というのは，先ほどのべた意味意識との区別がつきにくいのである。この点については次の「葛藤の洞察」の章でくわしく述べる。

④感情と感覚の，融合するあるいは不離不可分な部分

融合する部分というのは感情と身体感覚の関係である。たとえば自律訓練を例にあげよう。「気持ちが落ち着いている」という状態と「手や足が重たい」「息が楽にできている」という状態は渾然一体となっていて，両者の区別をつけることは困難である。また，激しい感情が生じているときには同時に生理的な変化も生じていることは周知の事実である。

不離不可分な部分はsensory feelingと呼ばれている。その一つが芸術体験である。たとえば音楽を聴いているとき。我々は音という知覚と情感を明瞭に区別することができるが，しかしこれらは不離不可分な関係にある。その音がない所に，その情感は存在しないのである。

⑤感性と理性

感覚と表象および感情を感性と呼び，ことばを理性と呼ぶことができる。感性だけでは認識には至らない。それを「～として覚知する」という理性の働き（思考）が加わって，はじめて認識に至る。たとえば授業終了のチャイムが鳴り終わった数分後，校舎から出てきた20歳前後の数人の一団。これを見て我々は様々な意味を一挙に了解する。視覚像に加えて様々な意味意識が同時に我々の意識に現われるのだ。そして意味意識のある部分は言語記号が与えられてことばとなる。

なお，理性は常に感性と結びついているわけではない。感性を伴わない思考も多く存在する。

Ⅳ　葛藤の洞察

葛藤の洞察過程を現象学的に考究したのがジェンドリンである。治療者は常にクライエントの「今，此処での」意識の体験過程に添わなければならない。その原則に立脚する限り，洞察の現象学的考察は不可欠である。この章は彼の考えに照合しながら整理したい。

1．葛藤の所在

葛藤は感情として意識のなかに存在する。身体感覚が融合している場合も多い。

2．洞察

葛藤は，最初の段階では，意識の中にある「何か不快な感情」として漠然と覚知されるだけである。それがどのようなものであるか，もっとはっきりと知るには，これに持続的に「注意」を向けなければならない。

その結果生じる意識現象のひとつの変化は，意味が理解されるようになることである。この現象を論理的に構成するとつぎのようになる。注意が向けられると直ちに感性的所与を「～として覚知する」という，思考が活発に働きはじ

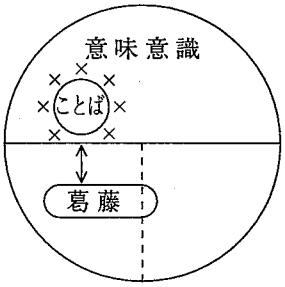

図5　葛藤の意味理解（論理モデル）

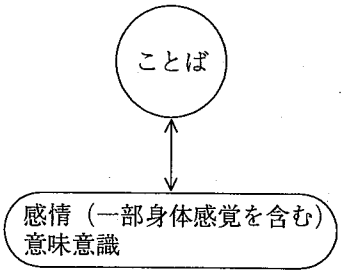

図6　葛藤の意味理解（現象モデル）

め，「何か不快な感情」という感性的所与に意味意識が賦与される。そして意味意識を明瞭な形にするためにことばが使われるという構図になる（図5参照）。

しかし意識の現象野では，我々はこのようには覚知しない。図6のように表示するのがもっとも自然である。感情も意味意識も共に感じられるものであり，その複合体とことばを照合するという図式である。Gendlin (1981, 1993) の考えを要約するとこのようになる。体験過程の自然な記述という点では彼の言うとおりである。

注意が向けられた結果生じる意識現象のあと一つの変化は，感情をしっかりと感じられるようになることである。洞察を構成する要素としては，先に述べた感情の意味を理解するということの他に，このことも銘記しておかなければならない。感情そのものは，意味が理解されれば後は絞りかすとして取り扱われるべき存在ではない。

3．洞察が生じるとどのような変化が起るか

真性の洞察が生じると，「ああ，そうだったのか！」というピッタリとした感じと同時に，堅い部分がほぐれるような解放感が生じる。これは一時的な情緒の解放（カタルシス）ではなく，永続的な情緒の変化をもたらす。

さて，ここで直ちに「なぜそうなのか」という問いが発せられよう。この問いに答えるには無意識的メカニズムについての仮説を用意しなければならない。しかし今のところ十分な説得力をもった仮説を我々は持たない。強いて言えば，人格という説明概念を用いて，洞察の生じたその時点で人格に変容が生じたのだというしかない。

4．防衛

葛藤はそう簡単に見つめられない。葛藤に注意を向けようとするとそれに抗うような動きが生じる。これを防衛という。防衛が生じれば，葛藤の洞察よりもまず先に防衛を処理しなければならない。どのようにすればよいか。防衛していることを認識すればよい。

ここで我々は防衛の概念を，論理的には2種類にわけて考えておく必要がある。「行き詰まっている感じ」「避けたい感じ」など，感情として現象学的に定義される防衛と，たとえば「防衛として症状が形成されている」と説明する場合のような，説明概念としての防衛である。

しかし治療場面では両者の概念を特に区別する必要はない。というのは，図6に示した葛藤の意味理解と同様に，意識の現象野では防衛も感情と意味意識の複合体であり，意味意識には説明概念も含まれるからである

V　葛藤の法則化

個々のケースで洞察された葛藤の正体を普遍化することが，葛藤の法則化である。（法則ということばが荷が重ければ通則と言い換えてもよい。）洞察的心理療法に属する各学派は，葛藤の法則について未だ一致した見解を示すに至っていない。この章ではその原因についてまず論じ，つぎに試論を提示したい。

1．法則化を妨げる要因

①記述と説明

理論とは観察された普遍的事実の「記述」とその「説明」から構成される。前者はつまり法則を見つけだすことである。さて，葛藤の法則化を妨げている要因のひとつは，我々が記述概念と説明概念の区別を明確に認識しないまま先達の理論を継承しがちな点にあるように思える。両者を混淆したまま学派間での討論をおこなっても話は嚙み合わない。まして妥当性の低い，混乱を引き起こすだけのような説明概念が淘汰されることなく温存されている場合があるから（それは学説の創始者よりもむしろ後継者の責任である），そうなると生産的な討論はまったく期待できない。洞察的心理療法の統一的理

論化のためには，我々はまず事実の記述というレベルにおいて互いの知見を綿密に照合していかなければならない。

②帰納法

その現象が普遍的であるという判断，つまり帰納推理は，1例に基づこうが100例に基づこうが「そう信ずる」という点において原理的にはみな同じ身分をもつ。とは言っても，それが公共的な支持を得るには数を重ねていく以外ない。

さて，ここでも既存の理論による呪縛という問題が存する。ある理論が主張するある普遍的現象なるものが実際に観察されることは稀であっても，その普遍性に対して積極的に疑義が唱えられることはあまりない。別の状況では観察され得た可能性を否定することはできないからである。普遍性のない主張が棄却されるには自然風化するのを待つしかない。自然風化に抗うものは教条主義のドグマである。

2．法則化の試論

これから述べることは方法論の問題ではなく，経験的知識に属する事柄である。葛藤の法則化に向けての具体的な議論に供するために，叩き台として試論を提出しておきたい。先達から得た知識をベースにしているのは言うまでもないが，どの部分を取り入れどの部分を修正しているか，その説明は紙幅の関係上省略する。

①葛藤はすべて対人関係的文脈のなかに現われる

葛藤の正体を探求していくと，どうしても対人関係の問題に行き着く。この事実に関してはどの学派も賛同してもらえるのではないだろうか。

②葛藤の構造

葛藤はいくつかの感情の複合体である。それらを抽出してみると，a)欲求，b)怒り，c)不安，という3つの感情要素に分類できるように思える。前二者についてはかなり明確な概念として提出できる。そして両者の関係も明瞭に把握できる。欲求が満たされない（あるいは勝手にそう思い込む）が故に怒りが生じる，という関係にある。

しかし「不安」の概念に関してはまだ検討すべき点を残している。怒りや攻撃性をもつことに対するリアクションとしての罪悪感や恐れ，それが不安として存する場合があるのは確かだが，葛藤全体を覆っていると表現するしかないような不安もある。両者は別々の概念として提出すべきかもしれない。引き続き検討したいと思っている。

③3種類の葛藤

対人関係的な葛藤の基本形は3種類に分類できるのではないか，というのが筆者の考えである。それらを命名すると，a)基本的信頼感，b)自律性，c)有能感，となる。これらの葛藤の形式的な構造は同じである。先に示したように欲求，怒り，不安という構成要素から成る。

3種類の葛藤の，それぞれの欲求はつぎのように記すことができよう。「どんなことがあっても私のそばを離れないで私を保護してほしい」（基本的信頼感），「自分のやりたいようにやりたい。だけど助けを求めたときには助けてね」（自律性），「ひとかどの力をもっていると認めてほしい」（有能感）。

これらの欲求は，人格の健全な発達のために満たされて然るべき欲求である。欲求を素直に出せない，あるいは欲求が満たされるかもしれないチャンスをみすみす自分から潰してしまうもの，それが葛藤であると筆者は考えている。洞察的心理療法の「洞察」が有する治療効果は，この歪みを矯正することにあり，欲求そのものを洞察によって埋めることはできない。これは先に指摘しておいた育て直しとか修正情動体験の問題につながる。

葛藤が克服された結果得られるものは「自信」である。3種の自信はつぎのように記すことができよう。「人を信じることができる」（基本的信頼感），「自分の力で問題を解決できる」（自律性），「誇りをもって生きていける」（有能感）。

Ⅵ　データと解釈

洞察的心理療法の科学性が議論されるとき最も争点になりやすいのが，解釈の妥当性である。解釈という用語はいろいろな意味で使われるが，ここでは「所与としてのデータを加工すること」という意味で用いたい。

1．データ

毎回の面接のあと記録されるデータはつぎの4種類に分類できる。a）クライエントの話した内容，b）クライエントの非言語的表現，c）治療者の発言，d）治療者の感情，である。このうち，解釈の対象となるデータはa）とb）である。c）とd）は解釈する際の参考資料となる。以下，b）とd）に関して若干の説明を加えておきたい。

①クライエントの非言語的表現

非言語的表現は，a）口調，b）表情や態度，c）芸術的表現，に分類できる。これらの表現から治療者が了解しようとしているものは，そこに含まれている感情である。「意識の構造」の章で「感情と感覚の不離不可分な部分」として説明しておいたように，非言語的表現の場合，感情は感覚と不離不可分に結びついて直覚的に把握される。そこには推論のような知的な加工は加わっていない。このような原基的な体験がまずあり，それを基にして，文脈の中でその意味を理解するという知的な了解がこれに加わってくる。後者がここで述べる解釈に相当する。

②治療者の感情

人と人が面するところ，必ず対人感情が生じる。クライエントのことをいまどう感じているか，治療者は常に敏感に内省しておく必要がある。それはクライエント理解のための重要な参考資料となる。それとは別に，主に治療者側の要因から引き起こされた感情もある。それを追求するのは治療者の自己分析の問題である。

2．解釈とは

解釈とは，「所与としてのデータを加工すること」と定義した。どのような加工がなされるか，我々が実際におこなっている作業を要約して記述すると次のようになる。a）データを取捨選択する，b）選択されたデータを“意味的なつながり”という接着剤を用いて整合的につなぎ合わせる，c）その際，データの欠けている部分は“仮説”という補塡剤で埋める，d）こうして，筋の通った一つの全体像を作り上げる。

3．解釈の妥当性

解釈の妥当性が議論されるとき主に問題になるのは，上記のうちb）とc）であろうと思われる。“意味的なつながり”にせよ“仮説”にせよ，その判断が正しいのか間違っているのか，誰でも気になることである。

①先験的と経験的

判断の真偽を問うとき，それが先験的判断なのか経験的判断なのか，まずそれを判断することは，科学の常套である。

はじめに「先験的判断」と「経験的判断」の意味を要約しておきたい。

先験的判断とは，経験とは関係なく真偽を裁定することができる判断をいう。それは“そうとしか考えざるを得ない”という必然性の確信感に基づいてなされる。確信感が真理の究極的な基準とはなり得ないが，われわれ人間としては此処から出発するしかない。先験的判断の代表は論理である。論理についてすこし言及しておきたい。我々は論理を道標に，経験的世界の知識をその核心へと向かって獲得してきた。そしてこの道標はいつも正しかった。しかし，これも最後まで我々を導いてはくれない。空間・時間に関する有限・無限の問題を論理は解けないからだ。物理学の世界ではクォークをさらに下位の要素に還元する試みがすでに行なわれているという。無限分割を論理は要請するからである。物理学者の佐藤（1988）はこれを指して“悪無限”と呼んでいる。

経験的判断とは経験に照らし合わさなければ真偽裁定をすることができない判断をいう。

さて，解釈は先験的判断なのだろうか，それとも経験的判断なのだろうか？Yaspers(1955)は著書「精神病理学総論」の中でこう言う。

“発生的了解（ここでいう解釈）の明証性は究極のものである。(中略)我々はこれ以上遡及できない直接的明証性を体験するのである。(中略）このような明証性は，種々の人格に対する経験を機縁として得られるが，反復される経験によって帰納的に証明されるものではなく，確信させる力を自分自身の中に持っている。”

これに対して安永（1992）はつぎのように反論する。“これでは解釈者各人各人の確信的明証性のぶつかりあいになってしまって収拾がつかないだろう。(中略)一つの了解モデルが生起の頻度だけによって当否を判断できぬ，ということは実際上正しいし，重要なことである。しかし，それがさらに類似の状況においてどれくらいの頻度で現われるかということは，我々が関心をもたざるを得ない事柄である。”

ヤスパースが強引に，解釈は先験的判断であるとした所を，安永は経験的判断の要素も含むと訂正したのである。我々の実感としては多くの者が安永の説に賛同するものと思う。

こうなると，そもそも先験的と経験的という二分法がどれほど画然としたものなのか，検討を要する。杖下（1968）は，両者を画然と峻別することはできないと結論している。そして，Yaspers(1962)によれば，そもそもカント自身，“両者はおそらくひとつの共通な，しかも我々に未知な根から発している，と言っているのである。(著書「カント」より)”

ヤスパースはこのような認識をもちながら，発生的了解を先験的判断であると断定したのだから，彼の結論はやはりやや強引であったと言わざるを得ない[1]。

先験的か経験的かという問題をめぐって，解釈と同様の困難に直面するのが道徳判断である。松下(1993)は，究極的な基礎づけを否定するプラグマティズム的－解釈学的認識論の立場から，“出自と来歴においてはアポステオリであるが，機能においてはアプリオリという両義性を身に帯びた‘歴史的アプリオリ’”という概念を提唱している。

以上の論議より，先験的か経験的かという枠組みに基づいて解釈の妥当性を論じても，あまり生産的な方向には向かわないと判断する。

②全体的整合性

では，我々は解釈の妥当性を測る基準として何に依るべきか？解釈学が古より技術として発展させてきた「部分と全体の解釈学的循環」，つまり「全体的整合性」に依るしかないと思う。現代の解釈学的認識論によって，この概念がいまや技術論的身分から方法論的身分へと格上げされようとしていることは，我々にとって心強い。

我々が実際に行なっている解釈作業をここでもう一度提示したい。a)データを取捨選択する，b)選択されたデータを“意味的なつながり”という接着剤を用いて整合的につなぎ合わせる，c)その際，データの欠けている部分は“仮説”という補塡剤で埋める，d)こうして，筋の通った一つの全体像を作り上げる。これを検討すればすぐ分かるように，a)，b)，c)の作業は，結局，d)の全体像を作り上げることへと集約される。

結論として，次のように述べることができよう。解釈過程に含まれる個々の判断は全体との整合性のなかでその妥当性を測られる。そして，全体としての筋が明瞭に浮かび上がってくればくるほど，個々の判断はその妥当性を増す。

③主題つけ

全体としての筋を読むことは「主題つけ」という作業をとおして具体的に体現される。新聞記事，ＫＪ法，昔国語の授業で習った文章の要約，等等，日常の様々な場面で「主題つけ」という方法は使われている。我々にとってあまりにも身近な方法であるが，筆者はこれを臨床実践のなかで用いて，その有用性を確信している。

全体にはヒエラルキーがありそれぞれのレベルで主題をつけることができるが，中核的な役割を果たすのは，毎回の面接記録に主題をつけることである。そのポイントを説明したい。第一点は，クライエントの表現した内容に限定して主題をつけることである。データをつなぎ合わせたり，欠けている部分を埋めるために使われた推論は，ここに混入しない。解釈作業の最終段階は，あくまでもデータをもって語らせるのである。第二点は，それまでの面接経過全体の文脈のなかで主題を考えることである。より大きな全体との整合性を念頭におきながら，各回を下位の全体としてまとめるのである。

なお筆者は，夢が報告された場合には，それにも主題をつけている。各回の面接をひとつの全体としたとき，その下位の全体として夢を取り扱うのである。主題のつけ方は，上記と同様で，クライエントや治療者がおこなった推論は混入せず，あくまでも夢の内容から抜粋してつけている。

その他，ＴＡＴやロールシャッハの解釈等，「主題つけ」は様々な場面で応用できることを，つけ加えておきたい。

註

1）原著では「カント」は1957年，「精神病理学総論（５版）」は1948年の発刊であるが、訳者によると1959年発刊の「精神病理学総論（７版）」も本文の内容は５版とまったく同じということである。

引用文献

藤原勝紀　1992　臨床心理学の方法論　氏原ほか（編）　心理臨床大事典　培風館　Pp.13－17.

Gendlin,E.T.（村瀬孝雄訳）　1981　体験過程と心理療法　ナツメ社.

Gendlin,E.T.（筒井健雄訳）　1993　体験過程と意味の創造　ぶっく東京.

松下良平　1993　<逃走>理論の批判的考察：道徳原理の伝達としての道徳教育．金沢大学教育学部紀要　教育科学編，**42**，219－262.

佐藤文隆　1988　宇宙論への招待　岩波書店.

杖下隆英　1968　アプリオリとアポステリオリ　林ほか（編）　哲学Ⅷ　存在と知識　岩波書店　Pp.101－134.

Yaspers,K.（内村・西村・島崎・岡田訳）1953　精神病理学総論　岩波書店.

Yaspers,K.（重田英世訳）　1962　ヤスパース選集８　カント　理想社.

安永浩　1992　安永浩著作集３　方法論と臨床概念　金剛出版.

参考文献

Bollnow,O.F.（西村・井上訳）　1975　認識の哲学　理想社.

Dilthey,W.（久野昭訳）　1987　解釈学の成立　以文社.

Fraisse,P.（波多野完治訳）1971　情動　波多野・南（監訳）　現代心理学Ｖ　感情と性格　白水社　Pp.115－222.

藤永保　1970　言語と思考　東洋（編）　講座　心理学８　思考と言語　東京大学出版会 Pp.237－269.

廣松渉　1988　新哲学入門　岩波書店.

廣松渉　1989　表情　岩波書店.

川喜田二郎　1967　発想法　中央公論社.

丸山高司　1985　人間科学の方法論争　勁草書房.

西丸四方　1971　臨床精神医学研究　みすず書房.

野家啓一　1993　歴史哲学の可能性と不可能性　新田ほか（編）　現代思想１　思想としての20世紀　岩波書店　Pp.289－341.

小笠原慈瑛　1967 心理学の定義　八木冕（編）　心理学Ｉ　培風館　Pp.1－18.

Piajet,J.（波多野完治訳）　1971　心理現象と生理現象との関係　波多野・南（監訳）　現代心理学Ｉ　心理学とは何か　白水社　Pp.179－248.

沢田允茂　1966　哲学の基礎　有信堂.

島崎敏樹　1964　感情の世界　岩波書店.

高橋澪子　1975　心理学における方法論の史的展開　八木冕（編）　心理学研究法１　方法論　東京大学出版会　Pp.19～77.

竹内敏雄（監修）1965　講座美学新思潮２　芸術の

解釈　美術出版社.
田邊元　1918　科学概論　岩波書店.
田邊元　1966　哲学入門：哲学の根本問題　筑摩書房.
戸川行男　1982 意識心理学への道　金子書房.
Vygotsky（柴田義松訳）1962　思考と言語　明治図書.
渡辺護　1989　芸術学　東京大学出版会.
柳瀬睦男　1984　科学の哲学　岩波書店.
Yaspers,K.（重田英世訳）1961　ヤスパース選集6　デカルトと哲学　理想社.